

CAテイルト車椅子試乗結果 報告

合同会社リハ・クリエイティブ

原 美悠紀



はじめに

- 今回、CA理論に基づき作成されたティルト型車椅子に施設入所中の方を中心に試乗していただいたため、その結果を報告する。

実施方法

現場でCAを行う際、介助者の技量によってその効果が大きく変化する。今回のティルト型では、介助者の技量に左右されずに誰でも、個々の利用者に合わせた状態に座位がとれることを目指していることから、以下の方法で試乗を行った。

- 移乗の際、ケアスタッフなど日常で関わるスタッフが行うことを想定して移乗を実施
- 介助者の技術により、座位姿勢が大きく異なることを想定して以下のことを行った
 - 車椅子への移乗後、座り直し行わない
 - その状態で数十分座っていただき、身体の痛みなどを利用者に確認した

Case 1

- 症例: 90代 男性
- 身体状態: 片麻痺、円背、車椅子乗車中に臀部の痛み(+)、表皮剥離(+)
- 実施内容: 試乗時間約50分、1回のみ
- 通常使用している車椅子: 普通型(CA理論のポジショニング実施)

Case 1

■ 通常 普通型車椅子



■ 端坐位姿勢



Case 1



Case1 結果

- 普通型車椅子に使用しているクッションがヘタれてしまい、車椅子乗車中の姿勢崩れがみられはじめていた。その際、臀部の痛み訴えがあり、表皮剥離もおきてしまった。
- CAティルト型車椅子に乗車した際、一見、姿勢崩れあり、居心地が悪いかと思われたが、本人はいたって問題ないとのこと。普通型車椅子を確認中に傾眠されるほど穏やかに過ごされた
- 端坐位姿勢では、右手で手すりを支える力が緩和、過度に力を入れることなく姿勢を保持することが可能となった
- 上肢の挙上が普通型乗車時と比べ円滑になった
- 以上のことから、介助者の技量に関わらず、本人の苦痛なく一定の時間は座れる可能性が考えられた
- 端坐位時の過緊張緩和、上肢挙上が比較的円滑になったことから日常的に使用することで、日常動作に変化がみられる可能性が考えられた

Case2

- 症例: 70代 女性
- 身体状態: 体幹低緊張、頸部過緊張、座位保持困難、他者からみると頭頸部の過緊張強く、痛みがでそうであるが、本人は既に痛みを感じなくなっており、安静時は痛み訴えなし。ただし、身体を動かすと痛み訴えあり
- 実施内容: 試乗時間約50分、1回のみ
- 通常使用している車椅子: リクライニング車椅子(基本的にはベッド上生活)

■通常 リクライニング車椅子



■CAティルト車椅子



Case2 結果

- 本人の痛み訴えは、通常時からないため、本人からの感想は特になし
- 口腔、身体共に運動に明らかな変化はみられなかった
- ◆ ここまで頭頸部に過緊張がみられると1回の介入では判断が難しい
- ◆ 介助者の技量に左右される症例であると思われた
- STが見て、少なからず全体的に過緊張の緩和はみられたため、継続して乗車することで何かしらの変化は期待できるのではないかと思われた

Case3

- 症例: 60代 男性
- 身体状態: 片麻痺、動作時に失調(+)、車椅子で困っていることは無し、認知機能が保たれているためCAティルト型車椅子の感想を伺いたく試乗していただいた
- 実施内容: 試乗時間約50分、1回のみ
- 通常使用している車椅子: リクライニング車椅子(移動時のみ、基本はリクライニングソファで過ごされている)

Case3

■通常 リクライニング車椅子



Case3

■CAティルト車椅子



Case3 結果

■ 本人の感想:

- 通常の車椅子に比べて乗り心地事態に大きな変化はなし
- 腕が安定しているような感じがする
- 腕が動かしやすい(左手が安定する気がする)

- 通常使用している車椅子だと麻痺側の上肢が過緊張をおこしテーブルや椅子から落ちてしまうことがあるもCAティルト型車椅子に乗車中は過緊張緩和あり、腕が動かしやすい印象

まとめ

■ 症例まとめ

- 今回、3症例に試乗を行った
- いずれも短い時間であったが、全ての症例で姿勢・動作に変化がみられた
- 車椅子へ移乗する際は、特段なにも決めずに実施し基本的に座り直しも行わなかったがいずれも症例も痛みなどの訴えは一度もなかった

以上のことから、CAティルト型車椅子に乗車することで、日々起きている痛みや過緊張の緩和が期待できると考えられた。また、case2を除いては、介助者の技量に左右されることなく、個々の症例の身体に合わせた姿勢になるため、日常的に乗車することで期待する効果がでやすくなるのではないかと考えられる。

まとめ

- STの視点から、
 - 姿勢と食事は密接に関わっており、嚥下機能面だけでなく、臀部の痛みから長く車椅子に座ってられないことや上肢操作が上手く行えないためことが原因で食事摂取量が低下してしまう場面も臨床において多々目にする。
また、頭頸部が安定しないことにより口腔機能の低下を起こしている例も少なくない。
 - 今回、試乗していただいたcase 1も姿勢の影響により口腔機能の低下がおき、食形態を下げていた。しかし、CA理論の基、車椅子を調整することで口腔機能の向上を認め、食形態を上げることが可能となった。
 - CA理論は、誰でも行える訳ではなく、特にポジショニングなどになれていない介護スタッフなどが行うには難易度が高い。
しかし、今回のCAティルト型車椅子で、介助者の技量を伴わず、CA理論の効果が簡単に期待できる可能性が考えられた。
 - 今後、CA車椅子が普及することで、姿勢を変えるだけで利用者本人のパフォーマンスが上がり、一人でも多くの利用者の生活が豊かになることを期待したい。

まとめ（改良していただきたいところ）

■ 車椅子のちょっと気になる点

- ・移動の際、押しにくい
 - 持ち手の位置を検討して欲しい
- ・介助者によっては、利用者の足をフットレストにぶつける危険を感じた
 - フットレストを外せるようにして欲しい